近代短歌・人と作品

土屋文明

近藤芳美著

土屋文明　シリーズ　近代短歌・人と作品1

昭和四十三年七月二十五日　印刷
昭和四十三年八月三十一日　発行

定価　六八〇円

著者　近藤芳美
発行者　南雲克雄
印刷者　印刷局朝陽会

株式会社　桜楓社
東京都千代田区神田猿楽町二の五
電話（二九一）五六六〇―二
振替　東京一八〇二〇

土屋文明

近藤芳美著

近代短歌・人と作品

目

次

はしがき
作家研究篇……七
一「ふゆくさ」以前・一……九
二「ふゆくさ」以前・二……三五
三「ふゆくさ」の時代・一……四〇
四「ふゆくさ」の時代・二……五五
五「往還集」の時代……七三
六「山谷集」の時代……八三
七「六月風」の時代……九七
八「小安集」の時代……一〇八
九「山の間の霧」の時代……一一九
十「韮菁集」の旅……一三五

十一　「山下水」の時代……一三七
十二　「自流泉」の時代……一四九
十三　「自流泉」以後……一五七
鑑賞篇……一六五
作品選……二六七
紀行篇……二七七
著者解題……二八八
年譜……二九三
引歌索引……三〇五

装幀　中山爾郎氏

スケッチ　吉田漱氏

作家研究篇

一　「ふゆくさ」以前・一

明治二十三年（一八九〇）に第一回帝国議会が開かれた。その開院式に、維新以来の自由民権運動の闘士たちは山高帽に威儀をただし、馬車に乗って、意気揚々と日比谷の仮議事堂に集まって来た。明治憲法発布の翌年。日本の近代史に、新しい一時代の始まった年である。

その年の九月十八日、土屋文明は群馬県群馬郡上郊村大字保渡田（現在は群馬町のうち）に生まれた。上郊村は榛名山の山裾の農村。その数粁南に高崎市があり、関東平野がさらに東南にむかってはるかにひらけている。父は保太郎。母はヒデ。母の入籍がおくれたため、生まれた子は翌二十四年（一八九一）一月二十三日の出生として役場にとどけられた。

そのふるさとの事を土屋文明は次のように記している。

――村は山麓と平野の境とも云うべきところに位置して居た。水田よりは畠の方が多かったが山林には遠かった。祠やお堂を包んで居た杉森雑木林も次から次と伐り払われて跡地は桑畑などになってゆく時代であった[1]――

農民たちは死火山のなだらかなふもとの村に、先祖代々の山畑を耕し、麦と陸稲を作り、桑を植え蚕を飼って貧しく生きていた。養蚕は遠い奈良朝の時代から、上毛野といわれていたその地方の百姓らの大切な副業であり、貢調のためのはてない労働でもあった。水田が乏しいため、米は貴重な穀物であった。(2)

毛の国はいつもかわける冬の原あからさまにも吾が村のみゆ　往還集
しらじらと亜鉛を葺ける寺の屋根立ちそふ木さへなきがさぶしさ　往還集

冬のまは上州の空ッ風と呼ばれる、面もむけられないほどの激しい西北風が荒れ狂った。だが、春が来ると、平野のひらけた東南の方にはてしらない春霞が立ちこめた。霞は背後の山々をも練絹のように青く包んだ。(3)山麓に近いため、村には山沢のような水流がいくつもたぎち流れていた。(4)流れには沢蟹がすみ、芹が生い茂った。

彼の生れた家もその山麓の村の農家の一つであった。数代前に、峠を越えて隣国の信州佐久郡から移住して来たのだともいう。(5)生れたころは半小作農程度の家だったのであろう。しかし、父の保太郎は農作にはあまり熱心ではなかった。

――父は生絲や繭の仲買が本業で、耕作の方は自家の食料程度といくらか養蚕をやるため

の桑畑を作るだけであった。もっとも秋とれた米は小作料に大部分をとられた残りをさえ、一時に金にかえて、食米は小買することが多かった。農作には全く興味がなく、田を作るのも、この一時的金ぐりが目的であったらしい[6]——

農村の因循な人生に満足しておれなかった善良で小心な野心家だったのかもしれない。同時に、そうした人たちを小さな野心に駆り立てる日清戦争にかけての一時代だった、といえるのかもしれない。その父は「子供に対して愛情があるのかないのか分らないような人間[7]」だった、と、彼は後年の回顧に記している。

家には祖母と母がいた。祖母は「農耕の中に育ってそれ以外の世界を知らなかった[8]」ような女であった。繭の売買に身を入れる父に代わって田畑を耕していた。

母の事は次のように歌われている。

年若き父を三人目の夫として来りしことを吾は知るのみ　小安集

父に嫁ぐまで、すでに不幸な人生を知って生きて来た農民の女だったのであろう。母方の祖父がひとり、後添いの女と共に、村の街道端に駄菓子屋をいとなんで人にうとまれながら孤独に暮していた[9]——

幼い土屋文明は、そのような環境の中に生い育って行った。貧しい生活と、重苦しい農村の人生が生い立ちの日から彼の上に暗く影を覆っていた。

幼くて育ちし如くぼろの上に老いて安らかにあらむ日もがな　山谷集
夜々の梟も今思ひがなしあらはなる臥所に育ちたりけり　小安集

何人かの弟と妹が彼のあとに生れた。早死した異母兄も一人あった。[10] 七才のころ、彼は一時隣り部落の伯父夫婦の家に預けられ、両親の手もとを離れて養育された。弟らが生まれ、糸繰りにいそがしい母の手を省くためであった。[11] 酒好きな伯父は幼い甥のために夜毎高等小学読本を読んでくれた。暗い三分芯のランプの下で、少年は伯父の朗読する太平記の阿新丸の物語などに涙を流していた[12]——

そのようないくつかの思い出の文章と共に、土屋文明の幼少期とその周囲の世界を知り得る手掛かりとなるものに、数多い、後年の彼の回想作品がある。故郷を去って東京に出た文明は、老年に至るまで、繰返し繰返しふるさとと少年の日の回顧を歌っている。そうした作品に一貫して語られているものは、日本の農村と農民の、地を這うような労働と、その人生に対する悲しみと怒りと共感である。

桑畑に芥くさりて吾が村に吾が育ちたる頃の思ほゆ　山谷集
桑の下に細々茄子をつくれるは吾が村のごと此所も貧しき　山谷集
夕日して諸掘り陸稲こく人の何か故郷のあはれがなしき　山谷集

回想作品は、あるときは故郷のあたりを通り過ぎたとき、あるときは他郷の旅の日の嘱目に連想として歌い出されている。そうした作品を重ね合わせて行けば、私たちはしだいに彼の生い立ちの世界を目にうかべ得る。

むれくさき塩引の香のただよひてわが生ひ立ちの日を思はしむ　住還集
紫の花の馬鈴薯のまづかりし幼き記憶おもひいでつも　山谷集
耕して大根の葉も捨てざりし農の生ひ立ちを子等に訓へつ　小安集
手の見ゆる間いそしむ夕方の農の心をわれもすこし知る　山の間の霧
麦ののぎの汗にまじりて肌をさす苦しさもなつかし思出となれば　山の間の霧
馬鈴薯が村に入りし頃の記憶あり真球なす新しさ掘り飽かざりき　山の間の霧

そこでは維新ののちも封建期と何ら変わらない日本の農奴の忍従の労働が、単調に繰り返え

されていたのであろう。否、その貧苦と窮乏は、明治の資本主義の成育とともに、しだいにはげしさを増して行こうとしていたのであろう。村人たちが林を伐り、次々に桑畑を開いて行ったという思い出も、それと共に加わる労働と貧困の循環を物語るものでなくて何であろう。日清戦争と前後して興るこの国の軽工業が、彼らの生活の上にも及んで来ていたのである。群馬県は製糸工業の日本の最初の中心地帯であった。耕作を捨て、祖母の悲しみをよそに繭買いに専念する父の人生も同様である。

彼は幼年時の周囲をも同じような思い出の作品の中に歌っている。幼ない少年の眼にうつった両親の姿はどうだったのであろう。

夜ふかく父母争ふを見たりける蚊帳の眠よ幼かりけり　　住還集
蚊蚋そとにひそひそ風呂敷を包み居し母を蔑む心今なし　　住還集

どのような事から争い合っていたその夜の父と母だったのであろう。争いのはて、家出するために泣きながら風呂敷包みを作っていたおぼろな母の面影。それにおびえて暑苦しい蚊蚋の中に、少年は息を殺して目を見開いていたのであろう。

幼い彼には、また次のように歌わなければならない、いまわしい記憶もあったのだ。

父の罪に警察に引かれ偽證せし幼き夜の記憶は打ち消しがたし　山谷集

貧しさがしだいに彼の家に不幸なかげを覆おうとしていたのだろうか。あせった父は石灰焼きの事業などに手を出し[13]、最後には家を売ってふるさとを捨てなければならない羽目になる。しかし、それはもっと後年のことである。

吾が父が石灰やきて損したる青倉山に夕日かがよふ　佳還集
ひたすらに父はかなしき売りし家に携へかへる夢しばしばにして　山谷集
父の代よりいりくめる金のいきさつに帰る日なけむあはれ故さと　山谷集

窮迫のはてに先祖伝来の耕地と屋敷を手離し、農民らは次々に都会に流離して行く。近代資本主義成長期の小農没落の過程を歴史はそのように私たちに教える。彼らの一家も、やがてその運命を型通りにたどる事になる。幼ない士屋文明は貧しい家の口減しのため、丁稚奉公に出されようとしたこともあったらしい。

大阪に丁稚たるべく定められし其の日の如く淋しき今日かな　自流泉